

二 反幕府勢力の動きと攻防

菊池武時らの挙兵

元弘三年（二二二三）閏二月、後醍醐天皇は隠岐を脱出し、名和長年に支えられて、伯耆船上山に立てこもった。このころ、肥後の菊池武時、阿蘇大宮司（元直）直らは、幕府の催促を受けて、瀬戸内海を東航し、備後鞆の津に入ったとき、近畿・中国地方の情勢のただならぬことを知って折り返し、少弐・大友氏を説いて、鎮西探題攻撃の約束を取りつけた。

鎮西探題北条英時の非常召集の催促を受けて、三月十一日、博多に到着し、翌三月十二日、探題府侍所へ出頭した菊池武時は、遅参と見なされて、著到簿への記名を拒否され、口論となった。翌十三日払暁、博多中の所々へ放火して、菊池武時は探題館攻撃に移った。これより前に、菊池武時は、少弐・大友方へ使を遣わし、先帝の命令書を渡して、急ぎ挙兵するよう促した。少弐貞経は、この使者二人を堅槽（福岡市博多区）において斬首し、この日の夕刻、北条英時のもとへ首を差し出した。大友貞宗も使者を切れといたので使者はその場から姿を消したという。

菊池武時は、錦旗を先頭に、松原口辻堂（博多区）という所から探題館に攻め寄せたが、辻堂の住家に放火したため、近づくことができず、早良小路を下り、先帝の御使いの人々が着到を受け付けると大声で知らせながら、櫛田浜口に打ち出し、対陣した。そこへ、少弐貞経の家来鬻場兵庫允が事の子細を尋問しようと陣へ出て



英時の花押

きたところ、若党一人とともに討ち果たされた。一方、北条一族の武蔵四郎・武田八郎らが、息浜おきのはま（福岡市西区）の菊池武時の宿所へ押しかけたところ、既に、菊池方は出陣したあとであったので、息浜の洲崎から回って櫛田浜口に出て、菊池方と合戦になった。武田八郎は負傷し、竹井孫七・同孫八・安富左近将監らが討ち死にした。

探題英時の館へ押し寄せた菊池方は、武時と子息三郎が犬射馬場において戦死し、探題館の中で合戦した菊池方は七〇人が討ち死にした。

菊池武時の嫡子二郎武重と阿蘇大宮司惟直は、ひそかに博多から肥後へ脱出した。探題方も多数の犠牲者を出した。

合戦が終わったのち、少弐・大友をはじめ、九州の武士が探題館に駆け付け、菊池武時・子息三郎頼隆・武時の弟覚勝らの首が犬射馬場に晒さらされ、夜は探題館の中に入れられた。四散した菊池方の落人狩りであげられた首二〇〇余も犬射馬場で晒されたので、三重に懸けられたという。

やがて、豊前の守護上総左近大夫糸田貞義も到着し、大隅の守護桜田三河守師頼しろう（北条一族）も博多へ向かう途中、菊池武時の孫と若党一〇人ばかりに行き合い、筑後国横隈（小都市）で討ち取って、首を博多へ持参した。探題英時は、この日のうちに、肥後菊池城へ討手を出発させた。

肥後の守護規矩掃部助高政は三月十五日に博多に入り、翌日、肥後国の地頭御家人を率いて、阿蘇へ向かった。阿蘇大宮司が菊池氏に一味したことが捕虜を尋問して明らかになったためである。

少弐・大友などの大名は、探題館の警衛を命ぜられた。

長門探題、十六日、長門から、早馬が到来し、長門探題北条上野介時直が一五〇〇余騎を率いて、伊予で敗退の河野一族土居九郎通益を討つべく渡海したところ、厚東氏らが心変わりして、後ろから矢を射始めたため、兵糧や馬を捨てて引き揚げた。このとき、防長の御家人一〇〇騎ばかりがとどまって討ち死にしたという。

尊良親王ら 十七日には、肥前彼杵（長崎県）から早馬が到来した。江串三郎入道という者が、先帝の第

肥前で蜂起

一の皇子尊良親王を土佐の配流先からひそかに迎えて、大村湾一带の武士に呼びかけて著到

をつけ始め、十四日に蜂起したという。前年の暮れから、千綿の奥の木庭という所にかくまっていたという。この日のうちに、肥前の御家人佐志二郎・値賀二郎・波多源太・多久太郎・高木伯耆太郎らを討手として差し向けた。

三月二十二日、関東へ送った早馬雑色五郎三郎が下着して言うには、金剛山の攻防は依然として続いており、赤松入道円心は京都突入の形勢にあった。二十三日、院宣を所持する八幡弥四郎宗安という者が斬首され晒された。これは去る二十日、大友氏へ院宣を渡そうとして捕らえられたもので、大友・少弐・菊池・平戸・日田・三窪氏あての六通を所持していた。二十四日には、高津入道道性というものが、一〇か国の兵を率いて、北国から、長門と石見の境三隅へ攻め寄せているという噂が流れた。

三月二十七日、規矩高政からの早馬による報告では、去る二十五日、阿蘇大宮司館に押し寄せたところ、大宮司惟直は、領内の住家を焼き払い、鞍岡山に引きこもった。難所で攻められないため、日向道側から攻めることにし、日向の柴原・桑内の兩人に命じて案内者を出させた。

二十九日、阿蘇大宮司と菊池二郎武重は、戦いに敗れ、鞍岡山を落ちて行方をくらませた。

長門方面の攻防

この日、長門方面では、吉見氏が探題方として三〇〇〇騎を率いて、石見から押し寄せたので、豊田・厚東氏らは軍勢を大峰へ差し向け合戦となった。桜田三河守師頼と乙隈某は門司関へ向かうべく、箱崎から出立した。

四月一日、門司関の桜田師頼からの報告によると、厚東・大峰地頭由利・伊佐などの人々が、高津入道道性に与力して、長門探題館へ押し寄せた。

しかし、射返されて、厚東の子息、高津道性の子息などが負傷して、退いた。翌日、桜田師頼は大隅国御家人を率いて渡海し、日田肥前権守・宗像大宮司・豊前の築城・上毛・下毛・宇佐四郡の人々が長門へ渡った。

このころ、京都近辺では、金剛山の落城が近く、赤松入道円心は京都七条まで侵入したが撃退され、多数の犠牲者を出して逐電し、もとの布引城にこもり、やがて石清水に進出したという報告が博多へもたらされた。

長門では豊前などから渡海した人々と戦った高津入道道性勢が一〇〇余人の戦死者を出して退散した。同日規矩高政が、肥後鞍岡山の戦いで討ち取った首三二、生け捕り二人を持って博多へ帰ってきた。

京都では、四月八日、石清水八幡を陣とする赤松円心と呼応して、伯耆船上山から上洛してきた千種忠顕ちくさただあきが京都に侵入し、激しい戦闘が行われ、多くの寺社や住家を焼亡させたが、またも退いた。